

幸せのコンタクトレンズ

経済学科3年 福山 翔一

どうして失くしてしまったのか
いつもつけているのが当たり前で
失くしたことに気がつかなかった
半分は黒く塗られていて
半分は薄く曇っている
私のコンタクトレンズ
それは私が見たくない物を
見せなかった
それは私の気がつかないことを
気付かせなかった
私は両脇の絶壁が見えて
それに委縮している
私は遠くの黒い霧がみえて
それに恐怖している
周りの人は平然と歩んでいる
まるで脇の絶壁や黒い霧が
見えてないかのように
あのレンズを通して見ると
世界はもっと明るく
黒い霧も気のせいに思えた
世界はこんなにも暗く
私を恐怖させるのに

今の私には見える
誰も幸せになどなれない
誰かが幸せを掴むとき
誰かを不幸にして
誰かが逃げるとき
誰かが負担をして
誰かが選んだとき
誰かは選ばれないで
レンズを通していたとき
素直に喜んでいた影には
必ず誰かの悲しみがあつた
コンタクトレンズはそれを隠す
コンタクトレンズは守っていた
幸せという幻想をまやかした
見せないことで
知らせないことで
死ぬなんて何年も先
だから考えない
友達は自分を裏切らない
信じているから
確かなことなどないのに
レンズを通すと簡単に

確信してしまう

それを先入観と思わず

みんなそれを人に押し付ける

みんなも同じだから

犯罪なんて遠い世界のこと

だからみんなこういう

まさか自分が

まさか友人が

まさかこんなことになるなんて

見えてない見えてない

レンズのせいで見えてない

ごく身近はそんなに明るくない

周りは闇ばかりだというのに

多くの人は知るたびに

善くも悪くも心が揺れる

自分が重病だと知り落ち込み

誤診だと知り歓喜し

友人が危篤だと知り悲しむ

豚肉を見ておいしそうだと思

豚を殺すのを見て残酷だと思

人間は動物とは違うんだと思

ああ、なんとなくわかる

レンズを失くした理由が

知恵の実を食べた者は

楽園へは戻れない

私は何人目の追放者だろう

レンズを通して見えない物は否定される

多数の人は少数の人が見えない

だから多数は少数を否定する

可笑しいよ

変だよ

そして傲慢にも自分の意思を

相手に押し付ける

みんなそうしてるんだから

お前もそうしろよ

自己中だな

空気読めよ

多くの場合

合理的な理由はない

少数は多数に認められ

多数にならなければ

否定され悪となる

私達はレンズに映るように

発言し行動しなければならぬ

みんなは皆中心主義なんだ

だから足りないんだ

アイデンティティーが

だから探すんだ

自分と他人との境界を

皆中心主義のなかで

そうでないかと否定されるから
みんな必死に生きている
皆中の外側に出ないように
そして幸せになるように
レンズに映る影は気のせい
みんなが目をそむけているから
違う違う違う
勘違い勘違い
都合の悪いものは否定される
それが幸せに繋がることを
心の中の根源的な
理解を超えるものが知っている
レンズは蔦を見せる
人と人に繋がれた蔦は
引っ張り合うことで
寂しさが紛れる
しかしそれは茨であることを
レンズは見せない
お互いに引っ張り合うたびに
棘が刺さり傷つく
相手が引っ張ることがなくなり
初めて自分の手が
血だらけであることに気が付く
今まで寂しさを隠していた
安心を与えてきた蔦は

もう安心を与えることはない
残るのは手の傷痕
寂しさと痛み
手放され別れて
あるいは亡くなって気が付く
時は手の傷を瘡蓋で覆い
いつしか傷痕も殆どなくなる
しかし寂しさは癒えず
また新たな蔦をつかむ
それは例外なく棘があり
また傷つけられる
出会ってよかった
レンズは私達にそう誤魔化す
それがレンズを失くした私に
見えた世界だった
どうして失くしてしまったのだろう
どうして気がつかなかったのか
見つければこの闇を見ないですむ
私のコンタクトレンズ
直視した世界は私から消えるだろうか
明るい世界の望みが捨てられない
失くしても絶望させてくれない
幸せのコンタクトレンズ